

宮崎汎会員の随想「忘れ得ぬ労使の人々」番外編14話

「ジョークは覚えるものです」 磯村尚徳・NHKテレビキャスター、国際ジャーナリスト

1980年代当時、わが国経済は国際競争の荒波の中で、関税障壁に守られながら高い経済成長を続けていた。当然諸外国から日本は関税を撤廃し市場開放せよ貿易自由化に踏み切るべきだと強い圧力が日に日に高まり、ようやく政府も産業界も重い腰を上げ、貿易自由化止む無しの機運となり大童の対応に追われることとなった。

産業界は日本に押し寄せてくる国際化の荒波に如何に取り組めばいいのか、いずれの企業も右往左往しながら対応に腐心していた。

日本生産性本部は、まず海外事情に精通する人材育成こそが、企業生き残りの基本と考え、日本初のビジネススクールである「経営アカデミー」の中に“国際コース”を新設することとした。

産業界の国際化に対するニーズサーベイを精力的に行い、ようやく国際コース研修カリキュラムの編成を終えた。

講師陣は海外での実体験を持つ学者や企業の専門家によって構成されることとなった。

この時産業界から是非聴いてみたいと強い要望のあった講師は、NHKの人気キャスターで国際ジャーナリストとして名高い磯村尚徳氏であった。



左 NHK の顔磯村尚徳氏

同氏はNHKの顔として、全国津々浦々知らない人がないほどの人気と高い知名度を持っていた。

分刻みの多忙なスケジュールの中、折衝する事務局員を前にして「いまは日本の夜明けだ、私が役に立てるなら協力しよう」と3時間にわたる講義を引き受けてくれたのである。

聴講生はわが国を代表する企業の海外派遣要員と目されるエリート集団で、各社は彼らが耳にする知識や情報を蓄積し国際化対応に備えようとしていた。

磯村氏の話はヨーロッパとりわけフランスの文化や社会システムを中心としながら、多岐にわたるテーマを理路整然としかも豊富な実体験を交えて語るのである。予定の3時間はあっ

という間に過ぎレクチャーが終了した。

聴講していた人々は、まるで夢から覚めたかのように大きなため息をつき、次いで捲き起こった拍手はしばらくやむことはなかった。

磯村氏が比較的長い時間を割いて話したことは、日本人に乏しい感覚として欧州では教養のある一定のレベル以上の人が集まると、ユーモアとかジョークを交えた会話で座が盛り上がり楽しむというくだりであった。

社会風刺や世相の動向などにヒントを得るジョークを会話の中に巧みに挟み込み座を盛り上げることは、話し手の目配り、センス、勉強の度合いなどを聞き手に知ってもらういい機会であるそうだと

日本人はユーモアとかジョークは、個人が生まれながらに備え持っている能力、センスではないかと思いつているが、実はそうではないと磯村氏は言うのである。

イギリスやフランスでは一定レベルにある人は、一生懸命ジョークを暗記し勉強するのだと言うのではないか。集まるとお互い同士「私は一週間でいくつ覚えた」と競い合い披露しあうこともあるというのである。

そして今ヨーロッパで最も新しく人気の高いジョークは、ソビエトに関するブラックジョークであるという具体例を披露してくれた。

当時のソ連の首脳は、ブレジネフからアンドロポフへ移り、さらに病弱なアンドロポフが死去して、チェルネンコが政権を引き継いだ。ソ連はかつての冷戦時代には鉄のカーテンと揶揄されたように、自由主義陣営にはソ連の内実、真実は非常に伝わりにくかった。政権交代には何か暗闘があると西側陣営では常に憶測を呼んでいたものである。

磯村氏の披露してくれた今流行りのジョークは、ブラックジョークであるが次のような内容であった。「ブレジネフが亡くなり天国で待っていると、病弱のアンドロポフがついに命運尽きて天国へやってきた。ブレジネフが「やあ」と声をかけるとアンドロポフが浮かぬ顔で“クレムリンにメガネを忘れてきてしまったのだ”と困ったそぶりを見せた。するとブレジネフは“なーに、心配することないさ。すぐチェルネンコが君の眼鏡を持って上がってくるさ”と間もなくチェルネンコの死期が近いことをジョークに仕立てたのだそうだ。

磯村氏はにこにこ笑いながら、私もよくジョークを暗記しましたよ、と述べたのである。

この話を聞いて本屋を覗いた。これまで関心を持たなかったためか“ジョーク集”がこんなに沢山並んでいることに気が付かなかったが、さっそく何冊か買い求め面白そうなものを二十ほど選び一生懸命覚えこんだ。

覚えたてのジョークを会話の中で披露しようと意気込んでいたが、ところが仕事場であろうが、アフターファイブであろうが、無論家庭でも苦勞しながら折角働きの悪い頭に叩き込んだジョークなのだが全く披露する機会はなかったのである。

そして文化の違いとはこんなところにもあるのかと国際間の相互理解の難しさを改めて考えさせられ、はからずも異文化交流とは頭で考えている以上に難しいものだと実感したのである。